**渡辺康代　著**

**『近世城下町の付祭りの変化―伊賀国上野と下野国烏山を事例に』**

海青社　2020年3月　315頁　3,600円＋税

300頁を超える本書の冒頭は歴史家のE.H.カーによる名言「歴史は，現在と過去との対話である」の引用から始まる。著者の思考は文字通り，過去と現在の往復であり，本書に通貫する研究スタンスとなっていた。

本書は「付祭り」に焦点をあてた一書である。付祭りとは領民らによる神仏に対する諸芸の奉納を指す。山車や花火などをイメージするとわかりやすい。神官や寺僧らが関与する「神事」と明確に分離させたのは，「生活者」としての側面に注目したいためであった。

著者の問題意識の根幹には付祭りの変化の度合いについての問いがある。その答えを探すべく考え抜かれた方法論は付祭りの内容と担い手の通時的検討であった。その道のりは下記のとおりである。


第1章　序 論
　第1節　近世城下町研究および近世都市祭礼研究の成果と課題
　第2節　本書の目的と課題
第2章　研究対象地域と研究方法
　第1節　伊賀国上野城下町における総鎮守・天神宮の歴史的推移と祭礼史料
　第2節　下野国烏山城下町における総鎮守・牛頭天王社の歴史的推移と祭礼史料
第3章　付祭り内容とその担い手の歴史的変遷
　第1節　付祭り内容の歴史的変遷
　第2節　行列型祭礼とその担い手の変化
　第3節　江戸の天下祭の変遷
第4章　総鎮守とその付祭りの担い手からみた伊賀国上野城下町の構造と変化
　第1節　中近世移行期における上野城下町の神事と付祭り
　第2節　近世上野城下町における三筋町町人による付祭り
　第3節　18世紀半ば以降における上野城下町の枝町町人による付祭りへの参加
　第4節　まとめ―上野城下町における中近世移行期から近世末期までの付祭りの推移
第5章　下野国烏山城下町における付祭り内容と担い手の変化
　第1節　中近世移行期における烏山城下町の住民構成と付祭り内容
　第2節　17世紀中後期における近世城下町の各町町人による付祭り
　第3節　18世紀以降における付祭り内容とその担い手の広がり
　第4節　まとめ―烏山城下町における中近世移行期から近世末期までの付祭りの推移
第6章　結　語
　第1節　上野と烏山における総鎮守とその付祭りの変化の共通性と相違
　第2節　課題と展望


1章では近世都市祭礼の研究史とその課題に言及される。歴史地理学では本多健一氏の業績を取り上げ，中近世における京都西陣の今宮祭について担い手の変化が「町」の形成期の重要な指標となっていることを指摘する。このようなアプローチは本書でも意識されており，「町」の空間構造の変容や町衆の構成が適宜，検討されている。

次に日本史の分野では黒田日出男氏や久留島浩氏などの研究にみる東照宮祭礼研究を取り上げる。そこでは城下町の祭礼に藩主の意向が強く反映していたこと，さらに17世紀末期から18世紀初期の絵巻物を史料として付祭りの中心が仮装行列であったことが紹介される。これらの知見に対して著者は次のように検討の必要性を説く。第1は絵巻物のような「時の断面」の現象をどの時点まで継続したとみるか，という点である。この指摘は，著者が桑名や宇都宮などの事例も含めて近世全般にわたり付祭りの概要に大きな変化が生じていたという知見に基づく。第2は藩主の意向以外に，付祭りの挙行に民衆の躍動的なエネルギーは作用していないのか，といった点である。その答え探しのための工夫が，「官祭」と「付祭り」を切り離し後者に焦点を当てることであった。「官祭」と「付祭り」が一体となって「祭礼」と捉えてきた先行研究の例に対して著者はあえて「付祭り」に着目することで，生活者としての民衆の姿を描くことを望んだ。

2章では付祭りの変化を観察できる伊賀国上野

城下町と下野国烏山城下町を研究対象とすることが明言される。そのための「祭礼史料」には「赤坂町祭礼記録」のように，史料名から「祭礼」情報が期待できる史料から「藩の正史」「香典帳」のように祭礼との関係性が一見無縁と思われるものまで幅広い。ここから著者が付祭りと関連する史料を丁寧に渉猟したことがうかがえる。さらにここで上野と烏山の現代の祭礼について現地調査や関係者からの聞き取りによる説明が加わり，祭礼空間の中で現在と過去を往復する。

3章では，「祭りとは」といった本質的な問いとして，「行列型祭礼」の説明および「江戸の天下祭の変遷」へと論が展開する。なぜ，江戸の祭礼を取り上げるのか，新刊情報から本書の構成を覗いた際には疑問に思ったのであるが，近世の地方都市で行われた付祭りは，江戸の天下祭の影響を多かれ少なかれ受けているという。このことは付祭りのモデルとして捉えるべきか，文化の拡散現象と捉えるべきか，議論を待ちたいが，著者が江戸の天下祭を取り上げる目的は，近世城下町でみられる多様な付祭りの「推移の尺度」としたいためであった。いわば条件の異なる対象に，同じ基準で測る「ものさし」としての江戸の祭りなのである。江戸の付祭りも面白い。17世紀初頭までは舞台芸能が行われていたが，それ以降は仮装行列が取り入れられ，18世紀半ばに人形や芝居を乗せた屋台が出される。その後は踊屋台が出され，大勢の町娘が踊り歩くようになっていく。江戸においても付祭りの変化の幅は大きい。

4・5章は論証の中心である。4章では，伊賀国上野城下の構造と変化を，付祭りの内容から照射していく。この手法は歴史地理学的アプローチと言えるであろう。まず著者は中近世移行期における上野城下の空間構造の復元に着手する。街区の有無，本町の比定など史料的制約が大きい中，「過去帳」，寛永期の城下絵図などを手掛かりにして過去との対話を試みる。上野城下町の構造は城主の交代を背景に目まぐるしく変化し，その過程で総鎮守の再建が起こり付祭りの内容にも影響を来したことを見出す。担い手にも変化が見出せる。16世紀末には各地の有力郷士の存在や影響力が大きかったが，17世紀半ばになると城下町の町人の力が増していく。演者が「何を見せたか」という点も変化に富む。中近世移行期には舞台芸能と踊り（A），17世紀半ば以降は仮装行列（B），そして18世紀半ばには仮装行列に人形車が加わり（C），18世紀末期以降にはそれに楼車（だんじり）と祇園囃子が付加された（D）。興味深い点はこれらの変化がなぜ生じたのかという点である。B→Cの背景には幕府による屋台禁止令を受けて人形車が盛んになっていた江戸の影響を受けている。またC→Dには多額の付祭り費用がかさむため著者は町の構成住民の変化に目をつける。すると19世紀には枝町・在郷からの新興商人の来住が目立っていたことがわかり，C→Dの変化は町の住民の変化と連動していたことを見出す。

5章で取り上げた烏山は15世紀以来の城をもつ下那須氏の本拠地であり，近世には2万石の譜代城下町であった。畑地優勢の同地方では楮・煙草などの商品作物生産や紙漉きが盛んであり，それらの運輸としての宇都宮に通じる街道や那珂川水運も発達していた。このような中で烏山城下町は江戸や水戸と近接していることもあり市場的・商業的地位を高めていった。その城下の総鎮守が牛頭天王社であった。17世紀半ばに仮装行列が始まるがこれは半世紀前に始まった江戸の山王祭などの付祭りの内容と共通するという。さらに17世紀後半には「屋台」が登場する。「屋台」の早い登場は町人自らの意向によるものであった。仮装行列が短期間で終焉したことで前章との違いを読者は意識するが，その答えを著者は江戸と烏山を往来する他国の有力商人を烏山城下の新たな構成員として抱え込んだことに見出す。17世紀後半以降の烏山に集まる商品作物の多様性や町外者との関わりを背景として，18世紀以降仕掛芝居屋台が中心となっていた。それは現在の烏山でみられる「山あげ祭」に通じる。「山あげ祭」では紙でつくった10数メートルにもおよぶ「大山」が町を練り歩き，担い手の躍動感は限りない。

6章では検証結果の普遍化を試みる。前章までに取り上げた事例のほかに検証の過程では津，宇都宮，桑名，高知などの付祭りや和歌山の東照宮祭礼など他地域の事例にも可能な限り触れている。その知見の一端を紹介したい。

仮装行列の採用については，上野ではA→Bという変化であり，また烏山では17世紀半ばに開始されたことは先述のとおりである。この仮装行列は元和元（1615）年に城内入りし将軍の上覧が

開始された江戸の山王祭をはじめ，和歌山，鳥取，名古屋などの東照宮祭礼で共通していた付祭りの内容であり，幕府が公認した官祭の付祭りであった。付祭りの内容からみた近世城下町とそれ以前の城下町の相違は仮装行列が採用されたか否かに見いだすことができるという。官祭に倣い，各藩においてもそれを採用したため，17世紀半ばに多くの近世城下町において仮装行列が城内入りするという付祭りの内容の共通性が見いだせた。というのも，仮装行列は藩主と城下町町人の意思とが相俟った結果とする。藩主は町人が氏子となり町の総鎮守の勧進もしくはその再建をともなう中で近世城下町の整備を進めた。整備の完遂は，仮装行列という付祭りの内容をもって顕示されたのであり，それがみられた上野，鳥山の17世紀半ばという時期は城下町としての「実質的な完成期」を示すとした。

さてここでいう，城下町の「実質的な完成」とは何を意味するのであろうか。評者なりに考えれば城下町という「器」に人々の暮らしが「なじんだ」ことを想像すべきであろうか。結語において著者は「近世城下町のプランナーが重要視したソフト面の事業」として付祭りの開催をあげ，城下町という「器」づくりは，イベントや総鎮守の勧進のようなソフト面としての「まちづくり」をともなって進行したと結ぶ。「まちづくり」とは住民の協働によってもたらされる「なじみ」の良い住空間の創造過程として理解すべきであろう。このように町のプランナーが住民による協働のきっかけづくりとしてイベント開催と場づくりを発起したと理解したとき，現代にも通じることに気づく。東日本大震災後に集団移転した宮城県東松島市の「野蒜ヶ丘団地」では，造成が完了した後の2017年10月に「祭り」が起きた。被災者の住宅再建や自治会設立などを喜び，地元の子どもらが神輿を担いで地区内を練り歩いた。その光景は新しい「器」に「なじんでいく」象徴のように映った。

以上が各章の要約である。ここからは評者のいささかの疑問について述べる。本書において付祭り内容の変化に2つの画期があり，前者の画期は17世紀半ばに見られた仮装行列の採用である。著者はその採用の是非が近世城下町とそれ以前の城下町の相違を示すとした。ところで近世日本を俯瞰するとき，仮装行列という付祭りの採用はどの程度みられるのであろうか。仮装行列の採用は城下町プランナーの「まちづくり」の一環としての側面のみならず，江戸の官祭を倣うことで幕府と自藩との良好な関係性を顕示するような効果はなかったのであろうか。幕府と藩との関係性の違いによって仮装行列の採否や採用時期に差違が生じるとの見方は有効なのであろうか。要は，近世初期の段階において，仮装行列の採否が城下町のソフト面における成熟度を示すシンプルな指標となり得るのかという点である。

つぎの疑問は2番目の画期についてである。そもそも著者の視座は付祭り内容の変化（＝画期）は城下町の構成住民の変化と連動するとの考えがあった。たとえば上野では18世紀末期以降，「楼車」（だんじり）の採用（2番目の画期）が起こっていたが，「楼車」の採用には多額の費用が掛かるため，新興商人の経済力を活用したうえで成し遂げたと説明する。評者の疑問はこの過程についてである。本書では「楼車の採用」以前は「付祭りの経済的負担も軽かったが，18世紀末期以降，楼車が採用されるようになると，付祭り費用を賄っていくために，新興町人の経済力を活用した付祭り入用金の徴収方法が採られ」たとする。ただし，新興商人の来住とその商勢が目立つのは19世紀と説明される。つまり「楼車」は構成住民の変化の兆候が見られた時期に打ち出されたことになる。1番目の画期は町の「完成」をみた暁としての変化であったのに対し，2番目の画期は町の変化の「途上」であったように読み取れる。第1の画期と第2の画期をもたらした原動力には違いがあり，後者には町民の民意というものをあげるが，付祭り内容の変化をもたらしたステークホルダーの意思決定過程について，史料的制約を承知しながらもさらなる説明を期待してしまう。

この2番目の画期に関しては，本書事例が周辺地域の付祭りの動向に影響を受けていたこと考慮すれば，付祭りを一種のイノベーションとして捉え，自藩での採用はそのイノベーションへのアクセス性に影響されていた可能性も示唆される。鳥山城下町において，江戸で流行していた仕掛芝居屋台の採用が比較的早かったのは，当地と江戸との近接性を背景に両者を往来する新興商人の存在があったことを本書で指摘しているが，これはイノベーションへのアクセス性に沿って解釈可能な

ことを示唆するようにも思われる。

その意味で考えれば，付祭りは「文化」としての特徴を有していることになる。著者はあえてこの概念を本書で採用していないものの，本書一部で「付祭り文化」と表現するとおり，文化的側面としての理解を常に有していたことがわかる。祭礼を「神事」と「付祭り」を併せたものとして扱われた先行研究に対し，本書ではそれらを明確に区別した。この区別は祭礼を「儀礼・儀式」と「娯楽」に分離させたと読み替えることもできよう。そうであるならば，社会の成熟とともに民意による「娯楽」の創造と改変が進んでいく過程もうなずける。画期の2番目はこの文化的側面としての性格を色濃く有していたと捉え直すこともできるのではないだろうか。

「付祭り」の文化的側面を強調するとき，改めて生じる問いは，「祭り」の「可変性」と「不変性」を問う著者の問題設定（「祭り」が「不変だったのか，変化があったのか」（「はじめに」より）そのものである。文化そのものが「可変性」を前提とする概念であることは多くの論者が示すところである[1]。その性質が近世にも適応可能なことは言うまでもない。もちろん，このような前提に立ったとしても，著者の実証プロセスに変更はなかったであろうし，本書で実証された内容にも支障がでるわけではない。いま，問いたいのは「祭り」が「不変」であるという観念の存在についてである。この種に近い疑問を近年，城下町研究者の松本四郎も指摘している。その疑問は2017年刊『城下町と日本人の心性』の書評を通じて示された。この本は「「城や城下町」が地域の人々の心性に，とりわけ共同体の精神にどう影響を及ぼしたのか」を検討する共同研究の成果であった。松本が気になった点は「研究会を組織している財団事務局が「城や城下町」に対する人々の親近感なるものを，その成立当初から変わらずに想定しているのではないか」という点であった[2]。いわば城下町に生きる人々の心性の「不変性」を強調する点への申し入れであった。そこで松本は「「城や城下町」の変化・発展」を「祭礼・芸能・若者」を通して検討していく。

このように「祭り」や城下町住民の心性の「不変性」という観念は学術的俎上でも見られる。それはなぜか，こうした捉え方に関連する点として，本書の中では柳田國男以来，民俗学では祭礼の「不変性」に着目し，そこから日本人の本質を見出そうとしてきた歩みについて言及する。これに加えて評者は先行研究の中で，祭礼を「神事」と「付祭り」を一括りにしてきた視点も影響するとみる。祭りに込められた「「神事性」とは，祭りを行うということの心意に支えられた「細則をまちがいなく遵守しているかどうか」に重きを置いた形式的行為」[3]である。このような性格と「娯楽」的な意味を有する「付祭り」の性格が混同されているのではないかと想像する。

さらに言えば近年の伝統芸能に込められた「真正性」の形成とも無縁ではないとみる。1950年に制定された文化財保護法は伝統芸能を「保護」の対象とみなしたエポックメーキングであったが，75年に「無形民俗文化財」の「指定制度」が導入されると伝統芸能の「不変性」が重視されるようになる。言い換えれば「正しい信仰の古い姿」「古風なまま」「本来の芸態」が良しとされたのである。このような施策に異論を唱えた大石[4]によれば指定制度や研究者によって「本来の姿を変えずによりよく保存したものがより価値が高く権威がある」とする認識こそが民俗芸能に価値意識を付与したと批判し，渡邊[5]も「指定を受けた「真正な」民俗芸能だけが生き残り」，「指定外の民俗芸能」には関心の希薄化や担い手の減少を招くという状況が生まれていると指摘した。選別された民俗芸能がもたらしたものは，社会に対する伝統芸能の「不変性」イメージの形成ではなかったのであろうか。

このような現状を踏まえれば著者の挑戦の意義は学術的な範疇に収まらず現代的な意義を併せ持つことが理解されよう。「付祭り」の「可変性」の検証は「祭り」そのものが持つ特性の一端である。もちろん「可変性」のみを強調するのは単眼的となるが，「可変性」の主因や成因を明らかにすることは容易ではない。ましてそれが過去であれば一層であろう。

さて，あとがきには本書上梓にあたり「回り道を何度もしながら」25年の歳月をかけたことが綴られている。しかし幾度の「回り道」をし「長く険しい」道のりがあったからこそ，その先に見えたものは「付祭り」の真理だったのではないだろうか。評者は著者と同世代である。その評者が自

責の念を込めて言えば，人文・社会科学を専攻する博士課程の大学院生は将来設計の効率性にそって学位論文の先に単行本の刊行を短期間で目指す。20代後半での刊行も少なくない。そのような著書には新鮮な切り口や勢いある論調，学説や先行研究への鋭い批判などがみられるが，時に実証性に弱さを感じる例もある。これに対して本書の仕事ぶりは丁寧である。読者の中には文体がやや回りくどいと思われる方もいるかもしれないが，それは一つ一つの論証を「石橋を叩いて渡る」ような注意深さで向きあっていた表れであろう。それだけ著者が設定した課題の難易度は高かった。

現代社会において「祭り」のもつ多面性には一層高い注目が集まる。著者の指摘する「社会的包摂」としての側面，以前から指摘される「ソーシャルキャピタル」の作用などである。本書が祭礼や城下町に関する研究者のみならず，社会教育や文化財行政に携わる方を含む多くの読者に，それぞれの関心にそって時間をかけて読み解いていただくことをお薦めしたい。難易度の高い課題に挑んだ価値ある一書である。

（渡辺理絵）

〔注〕

1）青木保「「伝統」と「文化」」（E・ホブズウム，T・レンジャー編，前川啓治，梶原景昭他訳『創られた伝統』紀伊國屋書店，1992），471-482頁。

2）松本四郎「城下町変質の過程―祭礼・芸能・若者を通して―」都留文科大学大学院紀要24，2020，9-28頁。

3）大石泰夫『芸能の〈伝承現場〉論―若者たちの民俗的学びの共同体―』ひつじ書房，2007，30頁。

4）前掲3）7-8頁。

5）渡邊洋子「8「祭り」という文化伝承・継承空間」京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター総括報告書編集事務局編『円環する教育のコラボレーション』京都大学大学院教育学研究科教育コラボレーション・センター，2013，120-131頁。